

論文

心理学教育に関する学生ニーズの検討

—学部学生・大学院生を対象とした調査から—

大橋 靖史^{*1}, 神 信人^{*1}, 中坪 太一郎^{*2}
小川 恵^{*1}, 千葉 浩彦^{*1}, 前田 寿紀^{*3}
岩井 阿礼^{*4}, 金丸 智美^{*2}, 久保田 美法^{*2}

本研究では、大学生・大学院生の心理学教育に対するニーズを明らかにするため2つの調査を実施した。研究1では、学部学生を対象に進学動機や心理学教育に対する認識、ニーズ等に関する質問紙調査を実施した。研究2では、大学院生を対象に学部教育と大学院教育の連携に関するインタビュー調査を実施した。分析の結果、興味関心がある授業と就職のための授業を区別する対応を学生が行なっていること、早い段階で将来の見通しを学生が持てるような対応をしていくことが必要なこと（研究1）、および学部学生と大学院生とでは求める学びに違いがあること、大学院では学びの捉え直しが生じること、資格取得のための受身的動機が強いこと（研究2）が明らかとなった。以上のことから、インターンシップやボランティア体験を通じ、授業で学んだ心理学を積極的に活用する機会を学びの中に設けることによる、心理学の有用性に関する理解の前倒しが心理学教育には有効であると考えられる。

キーワード：心理学教育，学生ニーズ，理解の前倒し，学びの捉え直し

問題と目的

2018年は心理学の国家資格である「公認心理師」の運用が開始され、心理学教育を行う者、現場にとって大きな変革の年となった。これまでは、心理学を学んだ学生が学部卒で取得可能な資格としては「認定心理士」があり、心理学を専門に学んだことを証明する資格としての機能を担っていた。一方でこの資格は臨床に特化したものではなく、将来、対人援助を仕事とすることを希望する者は、臨床現場に配属される心理系公務員への道を目指すか、または、指定大学院へ

※1 淑徳大学大学院総合福祉研究科 総合福祉学部教授

※2 淑徳大学大学院総合福祉研究科 総合福祉学部准教授

※3 淑徳大学総合福祉学部教授

※4 淑徳大学総合福祉学部准教授

の進学によって「臨床心理士」資格の取得を目指す道が大半であった。臨床心理士資格は、これまでの期間、心理学をベースとした対人援助を学校現場や医療機関など、さまざまな分野で専門的に行うための資格としての役割を果たしてきたといえる。これらの資格に対して「公認心理師」資格は、卒業後の研修などが必要とされるが、規定の科目を履修し学部の内容を修めることで受験資格を得ることも可能となった。これによって、「心理学の基礎教育を学部で、専門教育を大学院で」という従来の明確な棲み分けを簡単に行うことはできなくなったといえる。

そうすると、学部における心理学教育を大きく見直す必要が生じてくる。これまで、心理学教育、特に応用分野である臨床実践における教育体制の難しさについては、さまざまに議論がなされてきた(下山(2010)では、「日本で臨床心理学を学ぶ場合、港を出てすぐに誰もが迷いやすい難所がある」との例えがされている)。坂本・杉山・伊藤(2010)は、心理臨床に携わる人たちのクライアントを捉える枠組みの固定化について指摘しており、基礎心理学の知見を臨床に活かすことを提起している。心理学においては、一般的・基礎的心理学の多くが科学的学問としての性質を持ち、知見の一般化を目指しているのに対し、臨床実践は社会的な営みとしての性質を持ち、個別性を重視することが目指されることが多い(ただし、学習心理学と認知行動療法といった、両者の間の連続性を主張する立場もある)。これは、科学としての心理学、営みとしての臨床実践がそれぞれの専門性を追求すればするほど、両者の差が開いていくことを意味している。このような乖離の影響を最も強く受けるのは、高校まで学んだことがない心理学という学問を学びたいと期待を持って大学に入学してくる学生であろう。というのも、彼らの多くが入学前に触れるのは、基本的には社会的な営みとしての心理学の方であろう(もちろん、認知科学・神経科学等に関心を持って入学してくる学生もいることも確かである)。こうしたギャップは心理学教育の分野では自明のことであるが、セラピーや心理テストといった一般的に見聞きするようなものをメインにイメージして入学して来た学生に、どのような教育を提供することが学生のモチベーションの維持や心理学全般への理解に寄与するかについては、正解となる明確な方法があるわけではない。その意味では、社会的な営みとしての心理学に興味を持った学生が、入学後に(社会的な実践的営みからはやや距離を置く)アカデミックとしての心理学を主に学び、大学院に入学後、4年前に自分が興味を持っていた臨床実践としての心理学によりやく真剣に取り組むことができるという学びの流れは、特に学部学生が、自分が持っていた当初の興味関心と目の前の学習との間の距離に自身の中でうまく折り合いをつけていくことを、学生自身に委ねてきたやり方ともいえる。

しかしながら、公認心理師資格が始まり、文字通り、心理学の専門家を養成する責任が生じてきた現在の大学・大学院においては、学生自身の心理的折り合いや成長に期待するだけでなく、我が国の心理学教育の制度として、学部及び大学院において、学びのためのコースないしは仕掛けを準備しておくことも重要な取り組みとなる。例えば、岡林(2018)は、公認心理師養成に

合わせた心理学教育に関わる問題点について論じているが、その中で、最近の学生が True or False の傾向があるという状況をふまえ、心理学教育を行う際にはさまざまな理論が出てくる背景を方法論とともに理解し、自分勝手な解釈・判断を排除する必要があることを提案している。このような提言は心理学教育のベースとなる考え方であり、特に大学での学問的教育を行う際に、ひとつの結果に対しさまざまな見方があり得ることを身につけるためにも重要である。このような学問的な要点をきちんと伝えることに加え、現時の傾向を含む学生側のニーズを加味していくことが、時代や人の変化に合わせた教育として重要になってくるだろう。最初に述べたように、学生自身も日常見聞きした心理学（のようなもの）と大学で受ける教育とのギャップの影響を受けている。ある意味では心理学が「日常化」したことで資格化が進んだのであり、「日常化」したからこそ普段の生活の中で心理学（のようなもの）に触れることが多くなり、心理学科を希望してくる学生が出てくる。心理学に第一歩の興味関心を持った学生に、心理学教育で伝える必要がある内容に学生側のニーズを適切に組み込んだ教育が提供できれば、そのことは、心理学教育のコースを適応的に学生が修めることに対し有効に働き、ひいては我が国の心理学分野における人材の将来的な発展にもつながることが期待できる。

これらをふまえ本研究では、学部学生および大学院生の心理学教育に関するニーズについて明らかにすることを目的とする。学部学生を対象とした質問紙研究では、学部学生のうち卒業後実際に臨床分野へと進む学生が少数であることをふまえ、心理学科への進学動機と心理学教育に対するニーズについて調査することを目指した。また、大学院生を対象としたインタビュー調査では、学部教育と大学院教育とのつながりや相違を学生自身がどのように捉えているのか明らかにすることを目指した。これらの結果を参考に、今後の我が国における心理学教育において、学生のニーズの視点から必要と考えられる「新たな仕掛け」について考察を行うこととする。

研究1 学部学生を対象とした質問紙調査

心理学科への進学動機と心理学教育に対するニーズについて調査することを目的として研究1を実施した。

方法

研究参加者：対象は、淑徳大学総合福祉学部実践心理学科に所属する1年生から4年生の研究参加者であった。本研究の実施者である教員が、1年生から4年生の全学部学生（約400名）に対し、Web形式の質問紙調査への参加を依頼し、うち274名（男性116名、女性158名）が回答した（回答率約69%）。初めに、学年、年齢、性別への回答を求めた。その結果を表1に示す。なお研究参加者の平均年齢は20.19（±1.13）歳であった。

調査項目の一覧を表2に示す。調査内容は(丸番号は表2の質問番号を示す),自由記述式の調査項目として,①心理学科を選んだ理由,②心理学科に入学してどのような授業が受けられると想定していたか,④入学後の授業の内容について,入学前のイメージどおりだと思った点はどうのような点か,⑤入学後の授業の内容について,入学前のイメージと違うと思った点はどうのような点か,⑥今後心理学科にどのような授業があるといいと思うか,⑦現在の進路の希望,⑧就職に向けて役に立つと思った授業はあるかを設定した。また,⑦の進路希望先を大学院とした研究参加者を対象として,⑨大学院への進学を希望している場合,大学院進学に役に立つと思った授業はあるか,⑩大学院への進学を希望している場合,大学院でどのような授業または科目がある

表1 性別と学年

	男性	女性	計
1年生	28	39	67
2年生	35	45	80
3年生	32	47	79
4年生	21	27	48
計	116	158	274

表2 調査項目

質問No.	対象	項目	回答形式	結果グループ
	全員	あなたの学年を教えてください。	選択式	
	全員	あなたの年齢を教えてください。	自由記述	
	全員	あなたの性別を教えてください。	選択式	
①	全員	心理学科を選んだ理由について教えてください。	自由記述	A
②	全員	心理学科に入学して,どのような授業が受けられると想定していましたか。	自由記述	A
③	全員	入学後の授業の内容について,入学前のイメージとどれくらい近いですか。	5件法	A
④	全員	入学後の授業の内容について,入学前のイメージどおりだと思った点はどうのような点ですか。	自由記述	A
⑤	全員	入学後の授業の内容について,入学前のイメージと違うと思った点はどうのような点ですか。	自由記述	A
⑥	全員	今後心理学科にどのような授業があるいいと思いますか。	自由記述	A
⑦	全員	あなたの現在の進路の希望を教えてください。	自由記述	B
⑧	全員	就職に向けて役に立つと思った授業はありますか。	自由記述	B
⑨	大学院 進学希望者	大学院への進学を希望している人は,大学院進学に役に立つと思った授業はありますか。	自由記述	B
⑩	大学院 進学希望者	大学院への進学を希望している人は,大学院でどのような授業または科目があるいいと思いますか。	自由記述	B
⑪	全員	将来の見通しを持っている	5件法	B
⑫	全員	今の大学生活に満足している	5件法	C
⑬	全員	心理学の授業に満足している	5件法	C

といいと思うか、の2点について追加での調査を実施した。さらに、数値による評価項目として、③入学後の授業の内容について、入学前のイメージとどれくらい近いのか、⑪将来の見通しを持っているか、⑫今の大学生活に満足しているか、⑬心理学の授業に満足しているかについて、の4項目についてそれぞれ1（イメージと全く違う、あまり持っていない、満足していない、満足していない）から5（イメージどおり、非常に持っている、とても満足している、とても満足している）の5件法で回答を求めた。

分析方法：自由記述項目については、同様の回答をグループ化し、それぞれの内訳を視覚的に示すこととした。また、数値による評価項目については、学年ごとの平均値を示すとともに、それぞれの質問間の相関係数を算出した。

結果1 心理学科の選択に関する質問項目（結果グループA）

心理学科の選択に関連した質問（質問No.①～⑥）の結果を図1～6に示す。なお、質問No.③（図3）については、1（イメージと全く違う）～5（イメージどおり）までの範囲で回答を求め、回答の平均値は2.95（±0.915）であった。差の大きさを判断する参考として、学年ごとの得点の平均値を比較した結果、学年間の平均値に有意な差は見られなかった（ $F(3, 270) = 1.338, n.s.$ ）。

結果2 将来のことにに関する質問項目（結果グループB）

将来のことにに関する質問項目（質問No.⑦～⑪）の結果を図7～11に示す。なお、質問項目⑧、⑨、⑩（図8、9、10）については、「無回答」者は集計から除外した。また、将来の見通し（質問No.⑪）については1（あまり持っていない）～5（非常に持っている）までの範囲で回答を求めた。図11には学年ごとの得点の平均値を示す。差の大きさを判断するための参考として、学年間の差についての分析の結果、学年の効果が有意であり（ $F(3, 270) = 6.692, p < .001$ ）、多重比較の結果、4年生 > 1年生（ $p < .05$ ）・2年生（ $p < .01$ ）、3年生 > 2年生（ $p < .05$ ）であった。

結果3 現在の満足度に関する得点（結果グループC）

満足度に関連する質問（質問No.⑫、⑬）として、「今の大学生活」（図12）および「心理学の授業」（図13）のそれぞれについて、1（満足していない）～5（とても満足している）の範囲で回答を求めた。それぞれの回答について、学年ごとの結果を示す。なお、差の大きさを判断する参考として分析を行った結果、両方の質問（大学生活の満足度： $F(3, 270) = .885, n.s.$ 、心理学の授業： $F(3, 270) = .817, n.s.$ ）において、学年間の得点平均値における統計的に有意な差は確認されなかった。

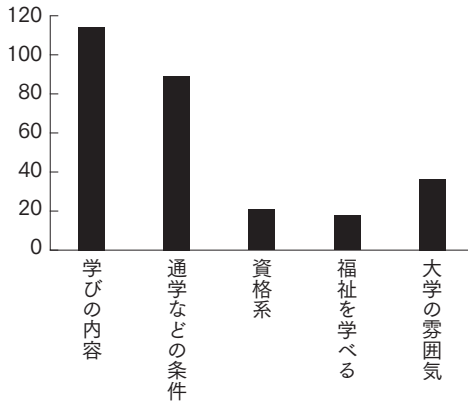


図1 心理学科を選んだ理由

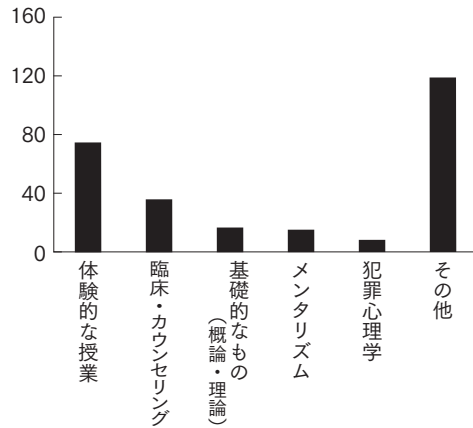


図2 心理学科に入学して受けられると想定していた授業

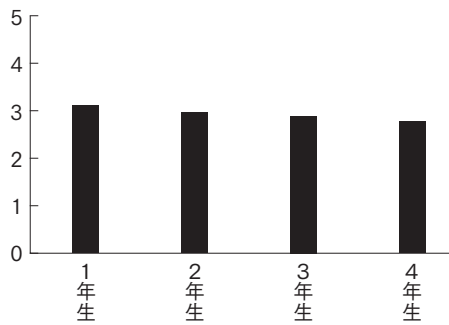


図3 学年別の入学前のイメージとの近さ(平均値)

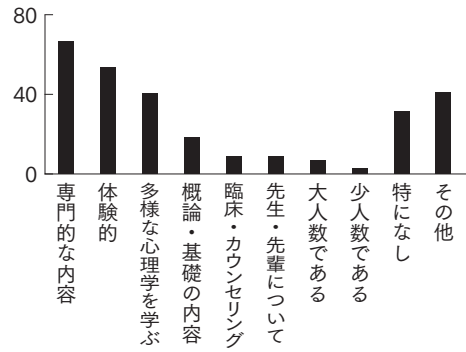


図4 入学前のイメージどおりだった授業内容

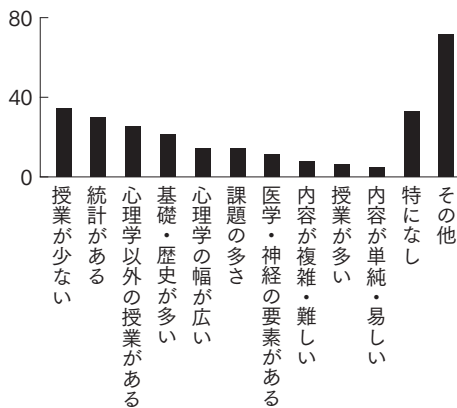


図5 入学前のイメージと異なる授業内容

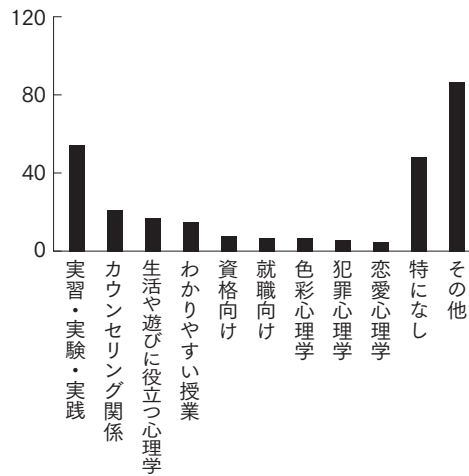


図6 今後心理学科に望む授業内容

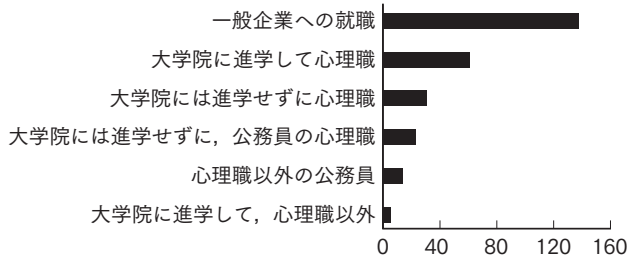


図7 現在の進路の希望

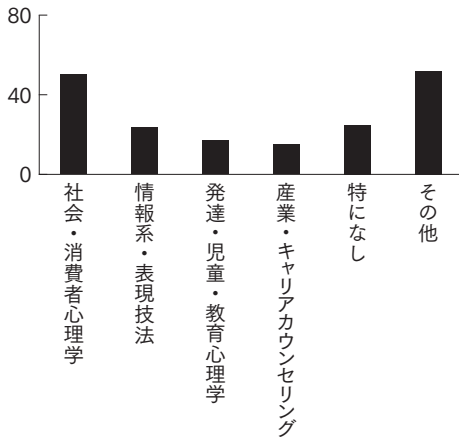


図8 就職に役立つと思った授業

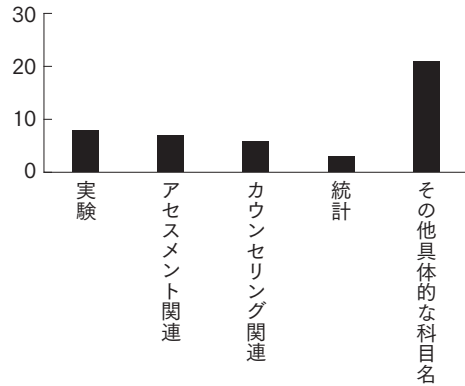


図9 大学院進学に役立つと思った授業

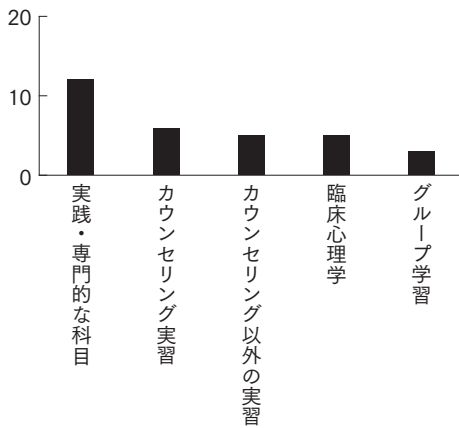


図10 大学院進学後に期待する授業

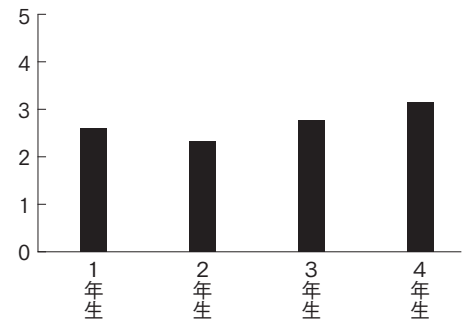


図11 学年ごとの将来の見通し(平均値)

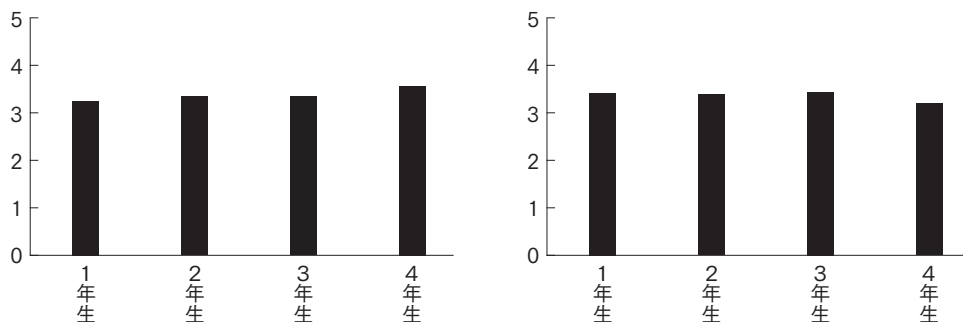


図 12 学年ごとの大学生活への満足度 (平均値) 図 13 学年ごとの心理学の授業への満足度 (平均値)

結果 4 質問間の関連

年齢に加え、入学前のイメージとの近さ (質問No.③), 将来の見通し (質問No.⑪), 大学生活の満足度 (質問No.⑫), 心理学の授業の満足度 (質問No.⑬) について, 質問間の関連を判断するための参考として, 相関係数を求めた。表 3 にその結果を示す。

表 3 質問間の相関

	1	2	3	4	5
1 年齢	—	-.115	.173	.046	-.072
2 入学前のイメージとの近さ			.235	.282	.460
3 将来の見通し				.409	.370
4 大学生活の満足度					.640
5 心理学の授業の満足度					—

研究 1 の考察

研究 1 の質問紙調査の結果, 心理学科への進学理由としては「学びの内容や資格に関すること」が, 入学後の想定としては「体験的な授業や臨床系や犯罪心理学などの学問以外で見聞きした可能性のある内容」が挙げられた。専門的な内容であることや体験することなどについては入学前の想定と同じものであったことが示された一方で, 統計の授業や心理学以外の授業については, それほど想定していなかったことが示された。また, 今後心理学科に望むものとしては, 生活や遊びに役立つ心理学や, 恋愛心理学など, 学問としてではなく日常の生活場面で活用したいと思われるものが挙げられている。

はじめに日常的な「営みとしての心理学」に触れた学生が心理学科に関心を持ち「学問としての心理学」に進むというプロセスについて述べたが, 入学後もこの傾向は変わらず, 日常に関連する心理学, または日常に関連させた説明を心理学科の学生が求めているものと考えられる。一方で, 興味関心で問われると臨床系の科目が多いのに比して, 就職に役立つと思った授業として

は、社会心理学や情報関連の授業などが多く挙げられている。このような結果からは、学生が「興味関心を惹かれる授業」と「就職のための授業」をある程度区別しながら受講しているとも考えられるが、これは、学生なりの対処方法のひとつと見ることもできる。場合によっては、興味関心がなくても「就職のため」と思えば納得して受講できるものもあるかもしれない。一方で社会心理学関連の授業などは学生のニーズに適合する部分も多く、今後望む内容の中の「実習・実験・実践」にも含まれていると思われる。その意味では、興味関心も高く就職にも役に立つ、といった捉え方をされているのではないだろうか。また、臨床系の科目が臨床以外の就職に役立つ可能性が低いと考えられているのであれば、それは臨床に関する授業の中で日常生活との接点を適切に示すことができているといえる。この辺りは、公認心理師の業務に心の健康教育が入っていることを考えれば、臨床群だけではなく支援方法についても取り扱っていくことが求められる。

また、質問間の相関分析の結果からは、年齢（学年）が上がっても将来の見通しや満足感が変化するわけではないこと、入学前のイメージとの近さは心理学の授業の満足度と正の相関があること、将来の見通しと大学生活の満足度と心理学の授業の満足度の関連についても正の相関が高いことが示された。このように、進路や見通しがある程度水準にある学生にとってはそれなりに満足いく授業内容となることを踏まえれば、早い段階で現時点での将来の見通しを学生が持てるような対応をしていくことが必要であり、また、満足いくような授業を展開できれば、学生の見通しが立ってくる可能性もある。

研究 2 大学院生を対象としたインタビュー調査

研究 1 の学部学生を対象としたアンケート調査を踏まえ、心理学教育において学部教育と大学院教育でどのように連携していると学生自身が捉えているのか明らかにすることを目的として、研究 2 では大学院生を対象にインタビューを行った。

方法

対象は、淑徳大学の学部から大学院へと進学した、淑徳大学大学院総合福祉研究科の修士課程に所属する大学院生（1年生3名、2年生3名）の計6名（うち男性3名）であった。インタビューガイドとして、学部学生を対象とした質問項目と同様の質問に加えて、大学院での学びの実際や特徴について、半構造化面接による調査を行った。得られた音声データは逐語録として書き起こし、心理学教育における学部大学院連携に関連すると思われる部分を抜粋し、事例形式で提示した上で考察を行うこととした。なお、発話の抜粋については、紙面の都合上、発話の内容に影響がないと思われる部分については適宜簡略化した。また、発話者のIはインタビューアーを指す。アンダーラインはそれぞれの結果の内容が示されている部分を表す。

結果1 心理学教育に関する期待についての語り

大学院生になった現在、どのような心理学教育を期待しているかについて、大学院生による発話の内容から、学部学生が期待する学びと大学院生が期待する学びとの間に違いがあることが示唆された。具体的には、研究法の授業に関するもの（Bさん）、心理療法の理論に関するもの（Eさん）、心理学以外の授業に関するもの（Gさん）であった。学部学生が体験的な授業や全般的な臨床系の科目を挙げているのに対して、ここでは研究手法や心理療法についての「各論」的な内容に言及がされている。また、心理学の学びを深めるためにその他の科目が挙げられている点からも、ある程度心理学の学びに自信があり、学びの軸足を常に心理学に置いているという感覚が見られることから、研究1の結果の傾向とは異なるものであったといえる。以下に関連する語りの抜粋を示す。

① Bさん（男性、修士2年）

I 39 他には何かありますか。

B 39 来年から実施されると思いますけど、うらやましいなって思ったのは、研究法 I II で I は完全に量的、II は質的でわかれるらしいんですよ。

I 40 えええ

B 40 それはまあ大変そうだけど、うらやましいなあとは思いますが。しっかり量で突き詰められるし、質は質で。割と修論やるとき質でやったけど、そんなに質を理解しているかと言われたらそうじゃなく質的研究をしたので、そこを授業でしっかり扱ってくれたら研究もやりやすかったかなあと思うので、まあうらやましいなあと思う点ではあります。

I 41 じゃあ次に行きますね。就職に向けて役に立つと思った授業はありますか。

B 41 まあ地域援助特論は実際に働いてる人が来て講義をしてくれるので、その具体的な話を聞けるのは就職をするうえですごい良いんじゃないかなって、ためになる授業でしたね。

② Eさん（女性、修士1年）

I 21 もうちょっと学派的な考え方がはっきりとした授業が受けられると思ってた。

E 21 そうだね、精神分析とかも、精神分析学派の人が教えなくとも、それだけで15回分とか。逆に学部の時にあったのが不思議で。逆に学部の時にとっておいて逆に良かったなと今は思うんだけど。だから学派オンリーの人が話すのも、とくに精神分析とか、そっちの道の人が話す方が面白いなっていうのが、学部の時に思ったから。意外と院ではがっつりそれをやるっていう時間が取れないもんなんだなーっていうのが、ちょっと予想外な感じはある。

③ Gさん（女性、修士2年）

G 29 もし余裕があれば心理学と関係ない授業が取れたらちょっと息抜きになったりするんじゃないかなって思いますね。大学の時は結構、全然ジャンルの違うものが取れたりした

なって今思うと。それはそれで楽しかったなって思うので。全然違う勉強ができると良いんじゃないかなってちょっと思います。

- I 30 心理学以外の。例えばどんなものを受けたいとかありますか。
- G 30 大学の時に受けて面白かったなって思ったのが、憲法の授業とか、日本社会と民族文化みたいな。そういうあんまり人の心理とか介在してないような。ちょっとそこから離れたような授業があるとそれはそれで面白いんじゃないかなって思います。
- I 31 ちょっと心理学とは違う視点で。視野が広がるのもあるし、息抜きのにも繋げられる。困った点として…、心理学の授業しかないというか。
- G 31 そうですね、そうです。

結果 2 学部学生時代の学びについての、当時と現在の評価に関する語り

大学院生になった現在、学部学生時代の学びを振り返って、当時と現在でどのような評価の差があるかといった点について、学部学生の時の評価と大学院に入学してからの評価が変容する可能性があることが示唆された。具体的には、もう少し臨床との関連で学べればよかった(Cさん)、もっと勉強しておけばよかった(Eさん)、あの授業は今思うと役に立った(Fさん)といった内容であった。関連する語りの抜粋を以下に示す。

① Cさん(女性, 修士2年生)

- I 43 学部と大学院の両方を経験して、両方のカリキュラムにおいて関連があると感じること、またもう少し関連があるといいと思うことについて教えてください。
- C 45 ああでもなんか、カウンセリングの授業とかはやっぱその枠とかの話とかはもうずっとその学部のたぶんA先生の授業とかでもあったし、院でもその枠とか、そういう話ばでてるし、その辺はまあ関連があるだろうし。まあ認知行動療法とかも、普通の学部の時の授業とさらに似た感じで、もっとこうロールプレイ多めで大学院ではやっていくから、よりなんか身に入ってきてやすい。
- I 47 もうちょっと関連があるといいなって思うことはありますか？
- C 47 結局実験とかたくさんやったけどあれあんまりさ、大学院に来たらそんなに。院来てからあの実験の結果とかやり方とか手続きとかをこう振り返らなかったね、全く。だから結局、みんなもう実験楽しかったり辛かったりしたけど、あんなだけの時間をかけて半期間やったものが、なんか無駄とは言わないけどごっそり抜けちゃった感があって、なんかその実験で得た知見、社会心理学的だけどその実験データとか知見みたいなのがどういう風に臨床の場とか、精神的な疾患がある人、発達的に問題がある人にとってはこの結果はこういう風に変化しますとか、そういう関連もたせて話してくれると、その大学で学んだことも無駄にならなかったかなあと。

② Eさん(女性, 修士1年)

I 30 授業内容って意味では, 課題の多さになるってこと?

E 30 難しさもあるのかな, とは思うな。なんか, 行動療法とか家族療法のビデオとかはちょっと学部の時にも見たような映像とかプリントとかもあったりしたから, 「これやったな」っていう復習みたいな部分で出来たのは学部の時に出といてよかったなっていう, その点で, 同じ先生でやってもらったから, よかったなっていう部分でもあるんだけど。精神医学とかはとにかく情報量がすごく多くて, 全部重要なんだろうけど, 全部は入ってこない今すぐ, みたいなのところの難しさはあったかなっていうのはありますか。学部の時の精神医学の授業だと, 本1冊でバーってやってたけど, そんなにすごく頭に入れてくってわけじゃなくて, その場その場でわかんない時に使えばいいよって言ってたけど, 院に入って, その場その場で使うのも大事だけど, それ以前に入れとけよみたいな状態だったから, 「あー, もっとやっつけばよかった」っていう, 悲しさはあったよね。あれ? みたいなの。詰め込み系のが多くて結構大変だったなって。

③ Fさん(男性, 修士1年)

I 61 もっと関連付ければいいのかって思うことはそんなに無くて……

F 61 だってそいつ次第だもん。全然意味なかったな一って思うやつは多分, 無いんじゃない? あのね, 学部の記憶があんまり無い。学部で要らないのってあるかな。心理の科目は役に立たないものは多分無いと思う。俺らが相当運が良かったのは多分海外文献講読, 英語の授業が心理用にしてくれてたことだと思うよね, 先生が。あれを心理の学生だからって心理用にしてくれてたじゃん。あれ相当ラッキーというか, いい先生なんだろうなって思うけど, もしかしたら全然関係ない英語の論文とか読まされてたら意味無かったなって思うかもしれないけど, そんなこと無かったし。心理の英語の単語とかいっぱい覚えさせてもらったわけだから。

結果3 心理専門職を目指す動機に関する語り

大学院生が対人援助の心理専門職を目指すことについては, 最初の前提として, 臨床心理士等の心理専門職を目指すために大学院への進学を希望していた, というものがある。そのうえで, 今の進路(大学院)を選択した理由が語られており, 学校や教員の特徴よりも, 周囲との関係や労力の少なさが挙げられている。これらは, 学びを深めるといった学問に対する積極的な動機というよりも, どちらかといえば受身的な動機といえる, また, 自身の能力や心身の状況との関係において動機を語る傾向が見られた。関連する語りについての抜粋を以下に示す。

① Aさん(男性, 修士1年)

I 18 進学先大学院を選んだ理由について教えてください。

A18 そうですね。まあその、好きな先生も居たし、でまあ知り合いというか、仲の良い人たちもここに来るとのことだったので。まあなんたらその、心理学を極めてやろうって
いう意気込みよりは、もう少しこの人たちと学びたいなるところが大きかったから、
ここにしたって感じですね。

② Bさん（男性，修士2年）

I 19 進学先として大学院を選んだ理由について教えてください。

B19 それはもう内部の推薦で行きたかったから。勉強はまあ多少はしてたけど、環境が変わ
るのも嫌だったし、知ってる人が多い環境でやりたかったのはあったんで、内部で進学
しようとは思いました。

③ Cさん（女性，修士2年）

I 16 進学先として大学院を選んだ理由について教えてください。

C16 外の受験も一瞬考えた。外の大学の受験も考えたんだけど、でもやっぱ4年通ってるし、慣れた環境で勉強しての方が身が入るって
いうか。

I 17 うんうん

C17 なんか、どのみち就職したらその新しい環境に飛び込まなきゃいけないんだったら、勉強するっていう上では慣れた環境で、ずっと延長線上で学んでた方が、私はモチベーシ
ョン保ちやすいなあみたいな。なんか、大学院に進学するプレッシャーにさらに新しい
環境が加わるのがすごくちょっと私は耐えられないな。

④ Gさん（女性，修士2年）

I 20 じゃあ次に、大学院に関することをお聞きします。進学先として大学院を選んだ理由について教えてください。

G20 はい、うーん。進路を選択するとき、確か就職するかも迷っていて、キャリア支援センターにお世話になりながら就活をちょっとしていたりっていうのを同時にしてたんですね。勉強会でやってる勉強が、私としては結構きつくて、でもちょっと楽しいかも
って思える部分も心理学の勉強してる中であって、こういうことが出来るなら大学院に進
むのも良いんじゃないかなって思って、就活はやめて大学院受験をして。ここだけしか
受験してないので受験して、受かったので入ったって感じですかね。

研究2の考察

インタビュー調査の結果、第一に、学部学生が期待する学びと大学院生が期待する学びとの間に違いがあることが示唆された。特に大学院生においては、研究法や臨床実践に関する理論などに関して、詳細な内容の講義を求めているといえる。第二に、学部における学びについて、学部学生の時の評価と大学院に入学してからの評価に変化が生まれ、捉え直しが行われる可能性がある

ることが示唆された。このことは、大学院生になると臨床現場での集中的、長期的な実習を経験していることが影響を与えているのかもしれない。現場で自分に足りない知識やさらに発展させたいスキルを考えることで、現在までに自分が学んできたことに対する振り返りが行われ、同時に学んだことがまた新たに意味のあるものとして認識されるのではないだろうか。例えば学部における認知心理学の講義ではおそらく直接的に臨床実践につながる内容は扱われない。しかし、高齢者施設で実習をすることで、記憶や注意といった認知機能に関する学習が有用なものだったと再認識されるといったことは起こりうるだろう。第三に、臨床心理士等の心理専門職を目指す動機に積極的な動機が少なく、受身的であり、また、自身の能力との関係において動機を語る傾向が見られた。このことは、大学院への進学が、学問的な興味関心よりも、資格取得に重点が置かれていること、また、環境を変えたり受験勉強をしてまでのモチベーションを持って進学をしてはいない、と考えることができるだろう。

総合考察

本研究では、大学生および大学院生の心理学教育に関するニーズについて明らかにすることを目的として調査を行った。研究1では、学部学生を対象とした質問紙調査を行い、心理学科への進学の動機や、心理学教育に対する現状の認識、今後のニーズ等に関する質問を設定し、現在の満足度等との関連について分析を行った。また、研究2では、大学院生を対象としたインタビュー調査を行い、主に心理学教育がどのように学部教育と大学院教育で連携していると学生自身が捉えているのか明らかにすることを目指した。これらの結果を踏まえて、以下において心理学教育で必要と考えられる「新たな仕掛け」について考えてみたい。

1. 学部学生を対象とした調査結果から

研究1の結果から、学生が興味関心がある授業と就職のための授業をある程度区別するような対処を行っている可能性や、早い段階で現時点での将来の見通しを学生が持てるような対応をしていくことが必要であることについて考察を行った。このような点に対して、例えば本学では正課外の授業を用いた取り組みを行っており、学部学生には入学後の前期のうちに受講してもらうようにしている。そこでは、受講者の先輩（本学の卒業・修了生）が演者として、学部時代にどのようなことを学び、そこからのつながりとして現在どのような仕事をしているのか、講演が行われる。講演の中では、例えば「統計の授業を受けたことがSEとしての仕事に役に立っている」や、臨床系の仕事に就く者であっても「実験レポートの授業が今のケースレポート作成に役立っている」など、学部学生があまり想定できないような話が展開されている。このような取り組みは、学部学生が早いうちに（あくまでもその時点での）将来の見通しを持つことに加え、興味関

心のある講義と就職のための授業を区別するといった対処に依らずに大学の授業を受けることに役立つかもしれない。また、本学の演習授業でテキストとして用いている『実践的な心理学の学び方』（大橋・神 2016）は、学部4年間を見通した構成になっており、学生が授業と日常生活を結びつけながら将来の見通しをもつための補助教材として用いられている。

2. 大学院生を対象としたインタビュー調査から

研究2においては、学部学生と大学院生では求める学びに違いがあること、大学院生になれば学部時代の学びの捉え直しが生じる可能性があること、臨床の専門職コースに進んだ大学院生であっても、学問的な興味関心よりも「資格取得のための受身的動機」が強いといった点について考察を行った。学びの違いや捉え直しに関しては、心理学を学ぶ学生の順調なプロセスとして肯定的にみることができる。可能であればこのようなプロセスがさらに早期になることで、心理学の学びがさらに発展すると考えられる。大学院生ほどの専門的な実習は難しくても、学部学生のうちに、実習に近い体験を行うことは学生側のニーズにもマッチしており、有効な手法になると考えられる。一方で、資格取得のための受身的動機については、慎重に考える必要がある。特に近年の大学院生の志望動機を振り返ると、自身の傷つき体験が始まりになっていることが多い。その意味では、大学院進学のための準備の時期は未だ自分の中で解決しておらず、専門家にはなりたくないものの、受身的動機にならざるを得ないという側面もあるだろう。実際には学部入学の時点で、自身の体験をネガティブに評価した状態に入ってくる学生が多いことを考えれば、心理学教育を行う側にもその専門家としての対応が求められているのかもしれない。

3. 心理学教育に求められる新たな取り組みとは

上記1, 2の考察をふまえ、更に全般的、包括的な心理学に求められる取り組みについて考えてみたい。岩崎・大橋・皆川（2012）は、学生を対象とした心理学に対するイメージの調査結果から、心理学を学ぶとできるようになることとして、「カウンセリングや対人理解につながる」等がみられたことを報告している。また、「社会心理学については学年が高くなると関心が強くなる」ことも報告しており、これは本調査において就職に役立つ授業として社会心理系の科目が挙げられたこととも一致するものである。また、岩崎らは別の報告において（大橋・岩崎・藤後 2013）、かつて心理学を専攻した社会人を対象に心理学を学ぶことの効果について調査し、人間関係に有用であるとの回答がみられたことを報告している。このような先行研究と本調査の結果を踏まえると、心理学教育に求められる重要なことは「心理学の有用性に関する理解の前倒し」であると考えられる。先行研究の結果からも、本調査の大学院生を対象とした調査からも、ある程度時間が経ち、さまざまな経験を経た後に心理学の有用性を再認識することが示されている。必ずしも現時点の学生のニーズと、後から考え感じた心理学の有用性とが一致するわけではない

め、この溝を埋めることが重要である。このためにできることは、授業で学んだ心理学を積極的に活用し、それに関するフィードバックを受ける機会を学びの中に設けることである。例えば、インターンシップでの経験を、単に活動報告をして終えるのではなく、心理学的な視点からディスカッションするなどの取り組みは、日常生活での活かし方を理解し、現在の心理学の学びに価値を与えるために有効となるかもしれない。これに加えて、心理専門職のために進学する学生に対しては、ボランティアのような形であっても対人援助に近い経験をすることで、今何を学ぶ必要があるのかが明確になるだろう。そこに教員や既に心理職として働く経験者のフィードバックが入ることで、必要と感じた学びの内容と実際に学んでいる内容の橋渡しが行われることとなる。このように、社会的な営みとして心理学に関心を持った学生に対しては、学問として学んだ心理学を在学中に社会的な営みの中で実際に考える経験を与えることで、心理学の有用性に関する理解の前倒しが行われ、学びにより積極的な意義を見いだせるかもしれない。

4. 今後の課題

本研究の結果は、ひとつの大学に所属する学生を対象としており、その特徴が反映されている。この点に留意したうえで結果を解釈するとともに、心理学科を卒業後の者たちを対象とした詳細な調査を加えていく必要がある。

附記

本研究の実施にあたり、平成29年度淑徳大学研究推進事業（取組名称：「心理学教育における本学の特徴と学部大学院科目連携の現状に関する調査研究」）の助成を受けた。また、本研究は淑徳大学倫理委員会の承認を得て実施された。

引用文献

- 岩崎智史・大橋恵・皆川順 2012「心理学に対するイメージ(1)－心理専攻学部生と非心理専攻学部生を対象とした横断的研究－」『東京未来大学研究紀要』5：1-9
- 岡林春雄 2018「心理学教育を考える」『徳島文理大学研究紀要』96：109-116
- 大橋恵・岩崎智史・藤後悦子 2013「心理学を学ぶことの効果について－心理学の学習がその後の社会人生活でどのように役立ったか－」『東京未来大学研究紀要』6：13-21
- 大橋靖史・神信人（編）2016『実践的な心理学の学びかた－学びを通して成長する－』ナカニシヤ出版
- 坂本真士・杉山崇・伊藤絵美 2010『臨床に活かす基礎心理学』東京大学出版会
- 下山晴彦 2010『これからの臨床心理学』東京大学出版会

A Survey of Student Needs for Psychology Education

Yasushi OHASHI, Nobuhito JIN, Takuro NAKATSUBO,
Satoshi OGAWA, Hirohiko CHIBA, Toshinori MAEDA,
Arei IWAI, Tomomi KANAMARU & Miho KUBOTA

In this study, two surveys were conducted to clarify the needs of undergraduate and graduate students for psychology education. In Study1, a questionnaire survey was conducted on undergraduate students' motivations, awareness of psychology education, needs, etc. In Study2, an interview survey on collaboration between undergraduate and postgraduate education was conducted for graduate students. It was found the students took action to distinguish between classes of interest and classes for employment, and it is useful to cope with the prospects of the future at an early stage (Study1), and that there was discrepancy between learning sought by undergraduate students and that by graduate students, they rethink learning in graduate schools, and that there is strong passive motivations for acquiring qualifications (Study2). Therefore, it is considered effective for psychology education to accelerate understanding by providing opportunities to actively use psychology learned in class through internships and volunteer experiences.

Keywords: Psychology Education, Student Needs, Advance Understanding, Recapture Learning